

豊洲、桁違いの汚染

証言

有害物質含む「豊洲雨」 1日120回20年間降った

東京都が築地市場（中央区）の豊洲新市場（江東区）移転の方針を決定した2001年から、「豊洲にあった東京ガス工場の規模を知らないのか。生鮮市場などありえない」と声を上げ、都議会でも証言してきた人がいます。東京ガス元労働者の伊野正之（いのただゆき）さん（78）です。伊野さんに聞きました。

元東京ガス労働組合中央委員

伊野の 正之さん（78）

私が東京ガス豊洲工場で働き始めたのは1957年です。石炭乾留（か）りゅう密閉した炉内で石炭を約1000度で加熱し、揮発分と残留物を分ける作業）によってガスを取り出す「室炉（しつろ）」と呼ばれる職場で働きました。室炉から出てくる石炭

殻は大量の水で冷やされ、消火塔からはモクモクと蒸気が立ち上りました。その蒸気が炭の粉を含んだ水滴となって降

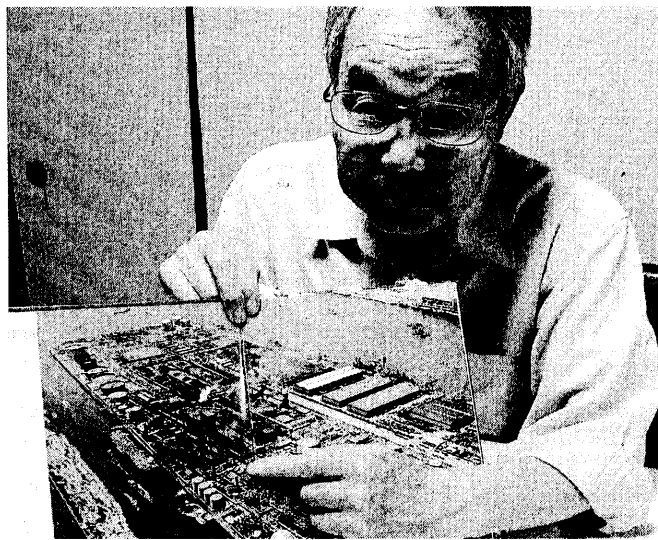
り、私たちは「豊洲雨」とよす（あめ）」と呼んでいました。豊洲雨に有害物質が含まれていたと知るのは後のことです。豊洲雨は1日当たり120回、20年間降り続け、豊洲の地面にしみ込みました。晴海や月島からも、蒸気はよく見え、豊洲の家ででした。石炭乾留の副産物のタールなどの残留物にもベンゼン、シアン、ヒ素、水銀、鉛、六価クロムなどの有害物質が含まれて

いました。規制が始まるが 当時は戦後復興から経済成長の時期で、首都圏のガス需要は逼迫（ひっぱ）りました。24時間365日、30年間も、益も正月も休まず、旺盛に稼働していた場所は、日本でも世界でも珍しく「世界一の工場だ」と会社は常々言っていました。1000人近い労働者が不夜城として稼働させたのが、豊洲工場です。

技術革新ごとに最新のプラントが建設され、原料は石炭から石油、ナフサ、LPG、天然ガスへ

と変わり、排出される有害物質もさまざまに変化しました。工場からの大量の煙は、湾岸沿いの他の工場と一体となってスモッグ公害として問題になりました。美濃部亮吉革新都

知事が誕生（1967年）し、やっと規制が始まりました。都庁と直通の「赤電話」が鳴ると、硫酸分をあまり出さない「ミナス」という高価な原料に切り替えたもので



工場全景写真を手に労働現場だった「室炉」を指さす伊野さん

排水も無害化することにはなっていました。実際は海水で薄めて、今では信じられない濃度で流しました。

震災後に液状化

豊洲は、東京湾を埋め立てた地盤の弱い土地です。地下水位が高く、海と川で囲まれ、潮の干満の影響をまろに受けま

す。 地震に潜った汚染は、それ自体が汚染されていた潮の満ち引きやパイピング現象（水圧の高いところから低いところへ向かって流れる現象）によって、縦にも横にも移動します。地面の中の汚染が動くのです。コンクリートで表面を覆ったとしても、地盤の悪い豊洲は地震の液状化で地中の物質が地上に出

てきます。 東日本大震災の翌日、豊洲を見にきました。土砂と一緒に泥水の大きな噴き出しを見て驚き、汚染も湧いたので

健康被害避けて 「築地も、駐留軍のクリーニング工場やガソリ

ンスタンドがあって、汚染されている」という人がいますが、質や桁が全く違います。ネズミとか、雨漏りなどは、比べる次元では到底ありません。

東京ガスの当事者は、汚染の事実を知っています。同様の工場があった南千住（荒川区）や大森（大田区）は、汚染対策を実施していますが手放していません。売れるような土壌にしようとすれば、巨額の汚染除去費が掛かるからでしょう。

公益事業者であるガス会社が大手ゼネコンと一緒に再開発ビジネスに手を染め、消費者の利益を忘れたり、健康被害を出したりするようなことは避けてほしい。

大企業による公害は、チソンの水俣から始まって東京電力の放射能汚染で極まっています。豊洲へ生鮮市場の移転を強行すれば、日本や世界に流通する食物に、東京ガスが出した汚染物質が付着し、人の体をいためることになるかもしれない。人間として、一労働者として、こんな恥ずかしいことはありません。